論文要旨

本博士学位請求論文は中国の内蒙古自治区東部モンゴル族 胡仁（フーリン）・烏力格尓（ウリゲル）の説唱芸術を中心内容としたものである。フィールド調査を主要な研究方法とし、文献研究法と異民族の説唱方式をまとめ、比較研究するなど方法をとり、モンゴル族民間の伝統説唱芸術を論述した。

胡仁・烏力格尓は胡琴物語の意である。説唱の内容形式上から見ると、胡仁・烏力格尓は本民族の俚諺や詩歌、賛、好来宝（ホルボ）などの文学表現形式に関係していて、説唱の発展から、説唱の伝統的な民族英雄史詩とも深い関わりがある。胡仁・烏力格尓の説唱において、モンゴル族の伝統的な民族文化の伝承形式や風俗禁忌、宗教崇拝など様々な文化元素の烙印が押されている。それゆえ、胡仁・烏力格尓説唱はモンゴル族の民間文芸史や通俗文学史、宗教史の重要な題材と史料にもなっている。今日の草原の砂漠化、都市化、現代化及び漢民化は日に日に勢力を強め、この民族の説唱形式は現在消滅の危機にある。それゆえ、この民族の伝統説唱の方式を研究、救済、保護、伝承することが本論文の中心的論点である。以下は本論文の内容構成である。

緒論では、文献の記載からみると、モンゴル族の起源は少なくとも1200年以上の歴史があることがはっきりである。しかしながら、有文字の民族史は800に至らず、この長期の無文字期においては「口伝心授」の方式が民族文化伝承の主要な方式となっていった。胡仁・烏力格尓説唱芸術の発展もこの伝承の特徴を貫いている。モンゴル族の周辺地域の多くの異民族の発展史はモンゴル族ほど久しくはないが、多民族にはそれぞれ数百年、中には千年以上もの説唱の歴史を有しているものもある。これと比較し、多くの学者がモンゴル族胡仁・烏力格尓の説唱には200年から300年ほどの発展史しか無いと考えている観点に対して、異論を挙げ、次の章の論述を下地として持ち出した。

第一章では、まずは、胡仁・烏力格尓説唱芸術の構成要素である「胡琴」、「烏力格尓」、「胡尓奇」の名称と発展の歴史に対して具体的な分析と論述を行い、これがモンゴル族胡仁・烏力格尓の説唱芸術を分析研究において、不可欠な前提条件である。この点に関して、『元史』など少数のモンゴル族の文献中において上述の要素を曖昧に記載されているだけだが、『楽府雑録』（段安節）、『楽書』（陳暘）、『試院聞胡琴作』（欧陽修）と中国国内外の学者の訪問記などの作品の中から発展の奇跡を見つけることができる。演じる仕方によってモンゴル族の「烏力格尓」には、「雅巴干（ヤバガン）・烏力格尓」「潮仁（チョウリン）・烏力格尓」「蟒古斯（マングス）・烏力格尓」、「本森（ベンセン）・烏力格尓」などの多くの形式があり、本章においてはこれらの関係に関しても分析と論述を行った。説唱芸術の担い手である 胡尓奇（ホルチ）に関して、13世紀に誕生したモンゴル族の重要文献である『蒙古秘史』の中に何度も出現している。異民族の文字記録の

文献である『欽定四庫全書』と『世界征服者史』『史集』など外国人学者の著作の中にも、モンゴル族の「説書人」、「講故事人」などの記載について述べられていることから、モンゴル族の胡仁・烏力格尓説唱は近代の産物ではなく、民族の発展史と同じく、「古已有之」の客観的な事実であるということを十分に論証しているといえるだろう。

次に、胡仁・烏力格尓説唱芸術を分析と論述するに際して、モンゴル族の英雄史詩の説唱を論じないわけにはいかない。現在の研究者の考えは、胡仁・烏力格尓説唱芸術の重要な発展の源は英雄史詩の内容形式である蟒古斯烏力格尓にあるというもので一致している（この点は第四章のフィールド調査の論述の中で一層の説明を行っている）。本章では英雄史詩の説唱と胡仁・烏力格尓の説唱関係で比較分析を行った。

第二章では、胡仁・烏力格尓の説唱芸術の誕生時期について、目下研究者の相違観点（1、12-13 世紀起源説；2、16-17 世紀起源説；3、18 世紀中期起源説；4、19 世紀起源説）を分析し、これを基礎に筆者自身の観点と依拠について論述した。胡仁・烏力格尓の説唱芸術は東部蒙古地区で長期的な発展を遂げたことが、異民族と交流し接触することが原因となったということを廃除することは出来ないのである。実際、今日の胡仁・烏力格尓の説唱題材の多くは、漢民族の歴史人物の物語を中心とした内容であり、今日までの発展に至っている。それゆえ、漢民族の説唱芸術はモンゴル族の説唱芸術の影響を述べないわけにはいかないのである。本章では学者たちの観点をまとめ、胡仁・烏力格尓の説唱芸術の起源という角度から、変文（ヘンブン）の説唱、宝巻、本森・烏力格尓、胡仁・烏力格尓の相互関係について論述した。

第三章では、モンゴル族の胡仁・烏力格尓説唱芸術の今日までの発展はすでに数百年の歴史があるが、我々が持っているおおくの疑問は未だ論証されていないのが現状である。例を挙げると、「胡尓奇」は文献中では多くの関連する断片的な記載があるが、具体的な胡尓奇と彼らの「講じた故事内容」については取り上げられていない。それゆえ、これまで叁布拉諾日布（サンブラノリブ）氏が編集した『蒙古胡尓奇三百人』が胡仁・烏力格尓の説唱芸術を研究する中で重要な参考資料であり、依拠となっていった。しかしながら、この重要とされる文献に対する総合研究はまだ現れてなく、得られる研究成果も一面的にすぎないのである。そこで本章では、好来宝を説賞するのが得意な胡尓奇、「蒙漢蔵」の三言語に精通している胡尓奇、寺に入り修行したことのある胡尓奇、身体に障害のある胡尓奇、馬頭琴を使用して胡仁・烏力格尓を説唱している胡尓奇、女性胡尓奇、名家の胡尓奇、薩満曲調を使用する胡尓奇、民歌を得意とする胡尓奇など九つの異なる角度から、叁布拉諾日布氏が編集した『蒙古胡尓奇三百人』に対して、異民族の影響と自民族の伝承方法などについて総合的な分析評述を行った。

本章でのもう一点の中心論点は説唱の流派の問題である。説唱流派の誕生の仕方は胡仁・烏力格尓の説唱芸術発展の成熟した結果である。本章中の流派の分類の特徴と胡尓奇が考

える流派について意識的に具体的なインタビューと分析を行い、これを基礎に流派の誕生と分類に対して筆者は自己の見解を述べた。

第四章では、モンゴル族の胡仁・烏力格尔は「以人為本」とする民間芸術形式である。胡仁・烏力格尔の説唱の中に、胡尔奇は「説唱」と「説唱の伝承」という二重任務を背負っている、そのゆえ、この民族の説唱芸術のルーツを研究するとそれは胡尔奇の研究に当たる。胡尔奇の研究に関して、最も直接的で最も効果的な方法は間違いなく、フィールド調査とインタビューであり、これも民俗学の重要な研究方式でもある。本章では、長年にわたって何度ものインタビューを行った白乙拉（バヤル）と顧如（グール）ら年配の胡尔奇に対して行った調査を整理、分析を行った。また、白乙拉胡尔奇が長年大切に保管していた胡仁・烏力格尔の原稿 ― 老満文の手書き写本『薛仁貴征東』を手に入ることができた。この写本に関して、文字分析を行ったと同時に、同内容の漢文版の『薛仁貴征東』と比較分析を行い、胡仁・烏力格尔の説唱は遅くとも、17 世紀初にすでに発展の最盛期に入っていたことが明らかである。それと同時に、異民族作品の物語を翻訳する過程で「民族化」という加工処理を行った事実についても論証した。

第五章では、胡仁・烏力格尔説唱は伝統的な民族芸術である。というのは、現実の中では、いまモンゴル族の伝統文化の息吹を見つけ出すことはすでに困難なこととなったからである。しかしながら、胡仁・烏力格尔説唱の中から多くのモンゴル族の伝統文化や習俗を依然として理解することは可能である。この点に関して、本章では実例を示し、胡仁・烏力格尔の説唱芸術は今日まで伝承されてきた民族伝統文化の重要な表現形のようであるということを述べた。したがってこの民間説唱芸術を保護し伝承することの深層意義についてさらに説明を加える。説唱の伝承では、目下すでに程度の甚だしい「断流」が現れていて、年配の胡尔奇に対するインタビューを通し、若い胡尔奇を育成することは非常に困難であると彼らは皆考えていて、これは説唱芸術を継承し、芸術を発展させるために重要な課題である。この民族の伝統的説唱芸術を保護する問題に対して、本章ではデータベースの作成から、データを享受し、電子版の『四部叢刊』の『蒙古秘史』を例とし検討と分析を行った。

終論では、序論の論述方法とは相反し、本章の論述中において、まずはモンゴル族の文字史の発展と演変を挙げた。モンゴル族の文字は初め回紇式蒙古文から現在同様の回紇式蒙古文、途中パクパ文、アリガリ文字などの様々な創作と踏襲が行われたが、これらモンゴル族の文字は統一して使用された民族文字となることはできなかったのである。こうした理由もあって、長期間にモンゴル族の書面文学の発展が止まる状態になっていた。これと比べて、口頭文学形式として胡仁・烏力格尔説唱は、書面文学は依然として十分な発展条件の前提の下、民族文化を伝承する重要な形式であるということは否定できない。次に、本章の論文全体に対する総合的な論述として、今後胡仁・烏力格尔説唱芸術の継承と発展に関し分析

とまとめを行った。本論文で展開して論述できなかった所といえば、音楽理論の知識不足から胡仁・烏力格尓説唱の曲調に対して分析と研究に至らなかったことである。今後音楽の角度から胡仁・烏力格尓説唱芸術の作品を研究されることを期待し、刮目して待つこととする。